大館市教科学習推進委員会だより（第３号）

こころみ

平成２３年１月２６日
担当　教務主任会

外国語活動から外国語科への円滑な移行を図るために

いよいよ来年度から小学校の新教育課程が全面実施されます。移行期間中から各小学校では外国語活動に取り組み，全面実施に向けた準備をしてきました。

小学校学習指導要領における「コミュニケーション能力の素地」とは，小学校の外国語活動を通して養われる言語や文化に対する体験的な理解，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度，外国語の音声や基本的な表現への慣れ親しみを指したものであり，中・高等学校の外国語科で目指すコミュニケーション能力を支えるものとなります。

以上のことから，外国語活動を小学校の学習としてとらえるだけではなく，外国語科に接続するものとしてとらえ，中学校においては学区内の小学校における外国語活動の指導の内容を把握することが，中学校への円滑な移行を図る観点から必要となります。

そこで,昨年度に引き続いて小・中連携を生かした外国語活動の取り組みを紹介します。

Ａ）成章中・成章小での実践

小・中同一学区という点を生かし，９年間を見通した教育という観点から共通目標と共通実践事項を設定するなど小・中の連携を密にしてきた。これまでの外国語活動の授業に関して，小学校としては専門的な授業による学習の深まりや児童に中学校の授業の雰囲気をつかませる機会と考え，中学校としては小学生の様子を把握しその後の指導に役立てる機会と考えて実施してきた。しかし，今年度は外国語活動で使われている英語ノートをもとに中学校の教員がその専門性を生かして授業を進めた。

①　事前の打ち合わせ

打ち合わせでは次のことを確認した。

・児童の実態や学習時の様子について
・当日の単元と内容について
・ゲーム的な活動をどのように取り入れるかについて
・電子黒板の活用について
・授業会場と電子黒板の確認

②　本　時

６年生の授業は中学校の教師がＴ１，小学校の教師がＴ２，５年生の授業は小学校の教師がＴ１，中学校の教師がＴ２となってすすめた。ゲーム的な要素を取り入れたり，電子黒板を使ったりしながら興味・関心を高め，内容の理解を深めるようにした。また，教師と児童，児童同士による活動を組み合わせながら学習を展開することで体験的に理解を深めさせることができた。

③　指導後の反省と感想

・小学校から中学校への円滑な移行を図るという点で，中学校の教師が外国語活動の内容（英語ノートや添付ソフトなど）を理解することが大切であることを確認できた。
・児童が中学校の授業の雰囲気を味わうことができたとともに，中学校の教師の児童理解にもつながった。
・小学校の教師にとって，中学校の英語教師の専門的な指導は参考になったとともに，ＴＴによる指導は有効であることが判明した。

Ｂ）矢立中・矢立小での実践

①　対象学年と年間時数

・５年生と６年生が年間３５時間（週１時間）実施し，授業は中学校英語科の教師が行っている。
・ＡＬＴとのＴＴ，小学校の先生とのＴＴも行っている。
・新学習指導要領「外国語活動」（「・・・外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながらコミュニケーション能力の素地を養う。」）にそってすすめている。

②　「英語ノート」の感想

・カラフルで絵がふんだんに取り入れられており，歌やチャンツが豊富である。
・異文化理解の学習になる。（中学校でも使えるものがある）
・中１と中２段階の基礎・基本になる部分が取り込まれている。

△ＣＤ(Listening Parts)のスピードが早い。
△「歌」「チャンツ」の練習には時間がかかる。
△いろいろな文型がどんどん出てくるため，児童は活動には積極的だが定着には至っていない。

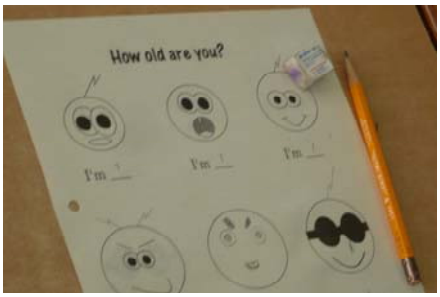
③　授業構築の考え方

☆「聞かせる」＞「言わせる」
　「聞くこと」はコミュニケーションの基本であり，言語習得における大切な手段（インプット），知識を学ぶ手段といえる。また，異文化理解における基本，すべての教科においての基盤となる。

・チャンツ，歌，ゲームなどの体験的な理解のもと，知らず知らずのうちに練習させる。
・日本語と英語のリズムなどの違いに気づかせる。
・外国の文化的背景に気づかせる。
　【ジェスチャー，各国の食べ物，数の言い方，ハロウィーン，クリスマスなど】

④　日常行っているゲーム

～チャンツ，歌，はえたたきゲーム（国旗、単語），ビンゴ，フルーツバスケット，アルファベット神経衰弱，カルタ，伝言ゲーム（リレー），体育館でおにごっこ，インタビューゲーム，福笑い，双六，クイズなど～



⑤　来年度への課題

・学級の実態を把握した上で指導しなければならない。
・中１の指導内容とリンクさせるため，７０時間（２年間）の英語活動の指導計画をさらに綿密なものにしていきたい。

Ｃ）小・中連携を生かした授業に向けて

○交流授業をするためには打ち合わせが不可欠である。学習内容の確認や展開の仕方などの他に時間の調整が必要なため，年度当初に計画を立てておくことが大切である。
○中学校の教師の専門的な知識や指導法を取り入れたり，ＴＴによる授業を行うことが大切である。
○外国語活動の研修内容に広がりや深まりをもたせるために，中学校の教師が研修会に参加することが大切である。
○外国語活動を一つの切り口として小・中の連携を図ることが，中１ギャップの解決につながると期待できる。